

「わたしひろがれ、みんなつながれ」

～小中連携した、いじめ・不登校の未然防止と不登校生等支援の取り組み～

松原市立恵我小学校 教諭 藤本 眞住

松原市立恵我南小学校 教諭 大塚 貢

松原市立松原第七中学校 教諭 平井 義弘

1. はじめに

松原第七中学校は、平成15年度から3年間、文部科学省の「研究開発学校」の指定を受けた。研究開発の課題は「不登校の未然防止、あるいは、不登校生の学校復帰を支援する教育課程と指導方法・評価、および学校・教職員・生徒集団のあり方についての研究開発」であった。また平成18年度の1年間延長を経て、さらに平成19年度からは、松原七中校区全体で「研究開発学校」の指定を受けることになり、これまでの課題にさらに「いじめの未然防止と校種間連携」が加えられた。そのような中で、小学校・幼稚園をも含めた11年間の中で、人間関係づくりに必要なターゲットスキルを設定し、それぞれの学校園で授業（「人間関係学科」：小学校・幼稚園では「あいあいタイム」、中学校ではHRS）に関する研究や取り組みを進めている。

この間、新教科「人間関係学科（あいあいタイム、HRS）」の研究開発を校区で進め、問題行動・いじめ・不登校等さまざまな課題と向き合った。その過程で、「ガイダンスカリキュラム（いわゆる攻めの生徒指導）」の必要性を実感した。とりわけ、いじめ・不登校の未然防止には、市民性教育（シチズンシップ教育）などを通じて、人間関係を調整・創造していく力を育てることが必要であることを学んだ。〔日本生徒指導学会会長、森田洋司氏の講演より〕さらに、そのような力を育てていくためには、手法として市民性教育、ディベート、さらにボランティア活動が有効であり、ひいては、それがいじめ・不登校の未然防止につながっていくのではないかということが校内で論議された。

ここでは、いじめ・不登校の未然防止と不登校生等支援の取り組みを、「人間関係学科（あいあいタイム、HRS）」の授業を計画、実施していく中から見てきたことや、各学校間連携、特に小中連携や各校の校内システムの構築など、3年間で進めてきたことについて成果と課題をまとめていく。

2. 不登校の未然防止のために

（1）学校生活調査、ほっとアンケート等の実施・分析

「ほっとできる学校」にするため、生徒の小さな変化に敏感になり、イヤな思いをしている生徒がいかなかなどを把握するために学校総体として意識的に取り組んだ。具体的には人間関係トレーニングやストレスマネジメントなどに関する授業に加え、どの学校でも実施されている「学校自己診断」（生徒、保護者、教職員）そして毎学期末に「学校生活調査」を実施、分析し毎回の全校生徒の状況を把握し、集団として、個人としての変化を追い続けながら、特徴的な変化がある場合は全体化し、今後の方針を立てるシステムができつつある。さらに「ほっとアンケート」を実施し、学校や家庭生活・友だち関係でのSOSをキャッチしようと努めた。特にこのアンケートでは、「いじめ」による被害について質問し、生徒たちに、「いじめを許さない」という学校・教員の姿勢の発信という意味合いも合わせ持つものでもあった。安心・安全、落ち着いた学校生活の前提は、落ち着いた授業であり、また良好な人間関係である。その意味でも「人間関係学科（あいあいタイム、HRS）」の学びは意義が大変大きい。

(2) 児童・生徒理解の推進...各校の不登校生等支援会議での論議

今まで学級、学年単位で取り組まれていた不登校生等の支援を、各学校全体で考えていくための会議として位置づけられてきている。毎週1回、欠席の多い児童・生徒たちについて状況を交流しながら、学校復帰に向けての手だてや関係諸機関との連携などを検討し、学校全体に不登校生や配慮を要する生徒たちに関わる課題を提起する会議として活動を進めている。この会議では、個人ではなかなか出すことができない方針（外部の機関との連携や全体としての動き）が毎週提起される。また、月に1回の職員全体会議「こころプロジェクト」を設定し、状況交流や方針の全体化を図っている。またこの他にも、校区の不登校生等支援会議（年2回）、小中の不登校支援担当者による合同支援会議（月1回）も実施し、不登校生支援が校区に広がりを見せ、さらに充実してきている。

(3) 不登校生への支援...ほっとスペース

不登校生が学級復帰に至る過程での居場所として不登校生のための部屋＝「ほっとスペース」を設置し、家庭と学校を結ぶ拠点として位置づけている。完全学校復帰をめざす中間ステーションとしての「ほっとスペース」では、対象生徒の興味や関心に応じて弾力的な教育課程を編成している。ここでは、学ぶ意欲を高め、学力への自信が持てるように支援をしている。教科の指導と合わせてスクールカウンセラーや養護教諭とも連携しながらストレスマネジメントや人間関係づくりのプログラムを実施し、学校復帰をめざしている。ほとんど登校できていなかった生徒がこの部屋を利用し、週に3、4日登校できるようになっている例も毎年のようにあり、学校全体として不登校率は毎年右肩下がり状況にある。「不登校生への支援」のシステムづくりと実際の支援をする中で見えてきたことがらもたくさんある（以下参照）。また、取り組みを進めていく中で職員の意識の変化をもたらしてきている。

学校の変化：「対策」から「支援」へ（人権課題としての不登校生への支援）

アセスメント（見立て）の大切さの気づき

不登校生への取り組みが学校教育全体の見直しに

（「学校教育自己診断、学校生活調査などで、取り組みの積極的分析、ふりかえりをするこの大切さ）

広がりと深まり：【担任】 【学年・学校】 【小中連携】 【関係諸機関】へ

（担任任せにしない、みんなで支援策を考え、動きをつくっていく心強さ）

小中連携の深化・・・未然防止は早期発見から（年2回の校区の小中学校の合同支援会議と毎月の小中不登校担当者会議の実施：年間30日以上はもちろん、いずれかの学年で欠席を10日以上経験した子どもに焦点を当てた引き継ぎ）

3. いじめの未然防止のために

(1) 「ほっとアンケート」とは

松原七中では3年前より「ほっとアンケート」を実施している。アンケートを集計し、生徒たちの状況を把握した上で、担任と生徒による「二者懇談」を1週間かけて実施している。わだ異の中心は、生徒たちの心の状況や友人関係などについて困っていることや悩んでいることである。3年生は「進路選択・決定」の不安などを聴き、自分の将来についてのアドバイス等を担任が行った。1・2年生では、学校生活での友だち関係などが主なテーマであった。また、家庭学習の方法など指導をした。もちろん、いじめによる被害についても聴き、生徒たちに、「いじめを許さない」・「いじめをなくす」といういじめへの学校・教員の姿勢を明確にすることができた。

ほっとアンケート

ほっとアンケートは、いじめの未然防止のために実施しています。このアンケートは、匿名で記入していただくことができます。記入した内容は、必ずしもいじめの被害を受けた生徒だけでなく、いじめを体験したことがある生徒、いじめを体験したことがある生徒の友人、いじめを体験したことがある生徒の友人の友人などにも関係する場合があります。記入した内容は、必ずしもいじめの被害を受けた生徒だけでなく、いじめを体験したことがある生徒、いじめを体験したことがある生徒の友人、いじめを体験したことがある生徒の友人の友人などにも関係する場合があります。

項目	はい	いいえ	わからない
1. いじめを体験したことがある	1	1	1
2. いじめを体験したことがある	1	1	1
3. いじめを体験したことがある	1	1	1
4. いじめを体験したことがある	1	1	1
5. いじめを体験したことがある	1	1	1
6. いじめを体験したことがある	1	1	1
7. いじめを体験したことがある	1	1	1
8. いじめを体験したことがある	1	1	1
9. いじめを体験したことがある	1	1	1
10. いじめを体験したことがある	1	1	1

(2) いじめ・不登校の未然防止に関連して

いじめの未然防止にむけては、受容と共感に包まれたい場所づくりを担うこともたちを育てることと、さらに、「いじめの4層構造」(前述、森田洋司氏による)における「仲裁者(アサーティブな人間関係調整力を身につけた生徒)」の役割を果たせる子どもを育てることが求められる。「仲裁者」が増えていけば、それに比例していじめが減っていくということである。これまでの人間関係学科の取組を通じて育ってきたアサーティブな子どもに、市民性教育で言われている人間関係調整力をさらに身につけさせることで、「仲裁者」という重要な役割を果たせる生徒になっていくのではないかという仮説設定をした。

松原七中での2003年度-2005年度までの研究開発では、子どもの自己肯定感と社会的有用感を育てることが、不登校の未然防止にむけた課題であることが確認され、取組が進められてきた。私たちはその成果を受け、子どもたちが、まわりの人たちとのつながりをつくり、社会とのつながり(ソーシャルボンド)を築くためのプロセスを追求してきた。自己肯定感からソーシャルボンドを基盤にした社会的有用感へつないでいくにはどうすればいいか。それは、学校やクラス、あるいは、子どもを取り巻く人間関係の中で、子どもたちがまわりから認められ、自らの課題と所属集団に関連する問題事象に取り組み、やりきったという成就感を、どのように育てていくのかということが課題になってくる。その意味でも、自己効力感と「いじめ」とが対極に存在するということがよくわかる。

(3) 生徒会が呼びかけるボランティア活動

中学校生活では、生徒会活動などの自主活動から学ぶことも多い。つまり、生徒会活動をもっと活用できれば、生徒たちが成功体験や達成感をより多く味わうことができ、それが自己肯定感や自己効力感そして社会的有用感を高めることになる。生徒会では、生徒会本部役員や各専門委員会(学年・生活環境・保健体育・文化図書)を中心として、あいさつ運動や地域の幼児・児童との交流の場づくりなどを行ってきた。特に、夏の「涼もう会」(本年度で12回目)・冬の「HOT×ほっと会」(同10回目)は校区の子どもたちの親交を深めるため七中生徒会が中心となり、生徒・教員・地域の人たちが「地域とのふれあい」を実感する場をつくることを目標に、生徒会で企画・運営が行われてきている。例年、どちらの取り組みも小さい子どもたちを中心に約500人の参加がある。地域の大人と一緒に活動し、教員以外の地域の大人から、ほめられ、認められることも大切である。一連のこれらの活動に関わる「地域協ボランティア」と、自分たちで作る「生徒会ボランティア」との両輪で、自己肯定感や自己効力感そして社会的有用感が高まっていくのであろう。

(4) 生徒会がんばり手帳 ～やさしいところ～

昨年度、「生徒会はみんなのもの」という意識を七中生全員に広げるため、いくつかの生徒会ボランティア活動を企画・実施した。それらの活動へのモチベーションは高く、各取り組みには多数の生徒たちの参加があった。また、新たにデザインや名称などを募集してつくった『生徒会がんばり手帳～やさしいところ～』に、生徒会ボランティア活動に参加するごとにスタンプがたまっていく。そのスタンプの数に応じて「職人」「達人」「名人」「有名人」「超有名人」の称号認定書を発行し、生徒集会で贈呈することにした。認定書を獲得することよりも、誰かの役に立てていると思えることに喜びと達成感を得ることができた。

4. 小学校の取り組みと小中連携

恵我小学校

(ア) いじめの未然防止に向けて

学校生活調査より「楽しく話せる友だちがいる」と答える児童が、毎回の調査で95%いることが

ら、概ね良好な友だち関係を築いていると思われる。しかし日常では特定の子に「仲間はずし」を行ったり、登下校途中にちょっかいをかけたりという事例があり、そのたびに学年ぐるみで指導し、問題が長期化・深刻化する前の解決が図られてきた。またこれら児童の行動の多くは、友だち関係の不安が背景にある。根気よく気持ちを聞きながら取り組んでいくことが必要である。それとともに力の強いものに流されていく子どもの姿があり、どのように友だち関係を築いていくか、またこのような児童の実態をすばやくキャッチし、共有できる教員の関係やシステムが大切になってくる。今後も仲間作りを通して子どもが自ら立ち上がっていけるようエンパワーすることができる指導をしていきたいと考えている。

（イ）不登校生等の支援の取り組み

本校では、2006年より校内不登校児童支援会議の中で、年間10日以上欠席したところのある子どもたちについて追跡調査を続け、個別の子どもとの状況を共有化している。情報の共有は「実態把握プロジェクト」「生活指導部」「不登校児童支援会議」の3部会で、日常の状況把握や学校生活調査等を個人のレベルで分析し、子どもの見立ての論議を中心におこなっている。また個別の子どもへの関わりを振り返り、一人ひとりの子どもへの今後の大きな方針を確認する場としている。また欠席は目立って多くなくても遅刻が目立つ子についても、月別に調査している。低学年の児童ほど、欠席・遅刻が家庭環境に大きく関連している。

支援会議の中では以下の4段階で個別の状況を評価している。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・担任で対応できる・学年で対応できる・基本的に学年で対応できるがしんどい部分がある・学校としての対応が必要 |
|--|

学校としての対応が必要と判断した場合や担任等から担当者への情報により支援が必要と判断した場合には管理職、学年、担当によるケース会議をおこなっている。今年度も、30日以上欠席のある児童と、遅刻の多い児童についてケース会議を持った。そこから家庭との連携の重要性をさらに感じ、学校全体で働きかけていくことにした。また、子どもの見立てを教職員の中で共有できるアセスメントシートの充実をはかっていくこと。その中で深刻な状況については、保護者への社会的支援も必要であり、子育て支援課や子ども家庭センターなど関係諸機関との連携を重視し、取り組みを進めている。また難しい実態や家庭環境の中で、子どもの見立てをしていく上でも、さまざまな視点や視野が必要であり、巡回相談の活用などさらに検討していきたい

恵我南小学校

（ア）校内不登校生等支援会議の取り組み

2006年度以降、不登校生等支援会議を開き、前年度の累積欠席日数が10日以上になる児童の実態の把握に努めている。メンバーは、当該児童の担任、養護教諭、管理職などである。昨年度年間欠席日数が30日以上の子（3名）を含む10日以上欠席者10名のほか、不登校の未然防止の観点から、遅刻が多い児童についても個別シートを作成し、実態把握と情報交換を継続しておこなっている。また、昨年度に10日以上欠席がなくても、気になる状況にある子どもについては同様に、毎月の欠席・遅刻等の状況把握をおこなっている。

不登校生等支援会議では、個別シートをもとに、不登校児童の、学級や家庭での生活の様子や保護者への働きかけの実態について交流し、生活状況や友だち関係を含めた支援のあり方について検討している。また関係諸機関と連携した取り組みも進めている。

毎月1回の会議の中で、今後の方針について話し合っているが、家庭との協力が得にくいのが実情である。したがってなかなか有効な手立てが打ちにくいという現実がある。しかし、不登校生等支

援会議を持ち、課題の共通認識につなげることで、不登校児童への方針を全体として出し、担任の孤立や孤独感・徒労感を防ぐことができている。

今後も、理由の如何を問わず、長期欠席の児童が復帰した際にクラスの中に自分の居場所を見つけ、友だちとの関係を築けるようなクラス作りを進めるとともに、子どもたちを取り巻く状況を見極め、個々の子どもたちの課題を把握し、家庭や関係諸機関との連絡を密にし、不登校の未然防止に取り組んでいきたい。

小中連携でいうと、6年生の中学校体育会参加や小中合同授業、小小の交流、地域協の取り組みや中学校生徒会による「HOT×ほっと会」や「涼もう会」等の行事への参加は、卒業生がスムーズに中学校生活をスタートさせるための、大きな力になっていると思われる。

(イ) いじめの未然防止の取り組み

月一回の生活指導部会では、各学級、学年のいじめや問題事象について情報交換をし、指導法についての交流をしている。問題によっては職員会議等で全体に報告し、全職員での問題の共有を図っている。また、集団になじみにくい児童や、よくトラブルを起こすなど、いじめにつながる可能性のある児童については、学校生活アンケートやあいあいタイムの振り返りなどをもとに、配慮を要する児童として個別シートを作成している。そして、校内実態把握チームで、月ごとの取り組みや教師の働きかけ、成果と課題などを出し合い、方針を考えている。

学校生活アンケート調査の結果によると、「無視される」「いやなことを言われる(される)」「仲間はずれにされる」など、直接的な行為は減少傾向にある。しかし、「こそこそ話」など陰で行なわれる事象は変化が見られず、今後もあいあいタイム等を通した、人間関係づくりを更に進める必要があると思われる。

5. おわりに...「いじめ・不登校の未然防止！」そのために

松原七中の人間関係学科の主要なターゲットスキルは「自己信頼」「共感性」「コミュニケーション力」「対人関係」である。年度や学期の節々には、「わたしのじゃがいも」「さいころトークン」「コロコロトークン」「ルーレットトークン」「すごろくトークン」などの自己開示のプログラムを実施している。その積み重ねが少なからず、集団づくりや居場所づくりをよい方向に導き、影響を与えている。いじめの未然防止に関わる有効なスキルは、自己認識を広げ共感性を高めることであると言われている。いじめ問題の解決にあたって常に課題となることが「人の気持ちがわかる」ということである。共感性〔＝人の気持ちを想像できる(WHOライフスキルの解説より)〕をさらに育てていくことが、いじめ未然防止の鍵になるのであろう。

これに対し、不登校に関していえば、日常的に不登校生等支援の取り組みをしたからといって、すぐ目に見えるような成果を期待することは難しい。不登校生には、粘り強く継続的な安定したかわりと支援が大切である。また、かわりのパイプを常に複数にし、学級担任だけの動きや、単なる「対策」や「対応」にしてしまうことなく、全体として方針を立てて取り組み、不登校生等を学年・学校の生徒として位置づけることが大切である。もちろん言うまでもないが、不登校の「原因探し」はほどほどにして的確な支援の安定供給こそが大切である。つまり、状況の見極めのあと、何らかの動きをつくり出すことが求められているのである。今後さらに、小中の連携をさらに進め、小6から中1への接続をスムーズにし、不登校になる前の手だての必要性がさらに求められているのである。

さらに述べると、おちついた学校づくりをめざすことによりケンカやいじめも確実に減少している。このような取り組みを継続していく中、生徒たちが「ほっとできる学校」の中心になり、また将来、地域の大人となり、地域づくりや、地域の子どもたちを育てる原動力になるような学校園を作っていきたい。

来たくなる学校づくりこそ、最大の未然防止である

：受容的、共感的、人権感覚あふれる学校、集団づくりを
早期発見、早期対応は未然防止のポイント

：欠席理由の明確でない生徒の把握を
生徒だけでなく、保護者へもソーシャルサポート（社会的支援）を

【お知らせです】

松原七中校区研究開発のＨＰにお越し下さい

<http://www.e-kokoro.ed.jp/matsubara/matsu7/08koukukenpatsu/koukuhyoushi.htm>

* 検索では **研究開発学校** **松原** の２つのキーワードを入れて頂ければ
トップに出てきます。

2009年11月4日（水）の研究開発学校最終報告会の案内もごらんになれます。

ＨＰでの参加申し込みも受け付けております。

今日の発表で、みなさんに説明しきれなかった部分も、当日、授業・全体会で見ていただ
けるとと思います。ぜひお越し下さい。お待ちしております。

e-mail: matsu7@matsubara.e-kokoro.ed.jp

ご質問、ご意見等ありましたらお寄せ下さい。